

## 多義語における歴史的変化とその展開 ：キャリア語義の分析

中 畠 剛

### 要旨

本稿は、多義語の意義・意味の変化をたどりながら意義どうしの関連、及び、その時代背景の歴史的過程を参照するアプローチにより、キャリア語義の生成メカニズムを明らかにしようとする試みである。

とりわけ、キャリア概念が「人生キャリア」と「職業キャリア」の二分法で把捉できるとするSuper（1990）の立場に立脚し、“career” “way” “life” “occupation” の4つの多義語に注目する。原語から別の意義へとたどる歴史の変遷を多義の共時的視点から考察することにより、意義どうしの関連について具体的に例証することを目的とする。

### キーワード

キャリアcareer、多義語 polysemous word、語義変化diachronic change、  
歴史参照アプローチ historical approach

### 1. はじめに

1999年（平成11年）12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続について（接続答申）」において、「キャリア教育」という文言が公的に登場して以来、産学官のさまざまな場面で「キャリア（career）」が飛び交うようになった。キャリア教育の重要性が叫ばれるようになったのは、20世紀後半におきた社会経済・産業的環境の国際化、グローバリゼーションを契機とした日本の産業界・職業界の構造的変革による日常生活への多大な影響が背景にあった。キャリアという言葉自体がそれぞれの時代や立場、用いられる場面等

によって極めて多様に使用された結果、さまざまな異なる見解が生じたこともキャリア教育に対する正確な理解を進みづらくした（文部科学省, 2011）。すなわち、固有の学問領域（教育学・心理学・経営学・経済学・社会学・法学等）と仕事領域（研究・教育・実務支援）の多様性がキャリア教育の効果測定を不鮮明にしてきた感は否めない。その反面、創造的相互作用（すなわち、創発<sup>1)</sup>という形）により多様性ゆえの創造的価値を生み出すことへの模索がすでに始まっている（日本キャリアデザイン学会, 2014）。故に、「キャリア」の原義や意義の派生過程に関して時間軸を逆さに立ち返る作業はキャリア教育関係者（関係各所）が共通認識をもつ契機になるという点でも重要である。少なくとも、多様な意義で用いられるキャリア自体が経験の集積に根ざす以上、過去を「歴史」として振り返り、参照する方法は有効であろう。にもかかわらず、歴史的アプローチは近年の労働研究ではあまり見られなくなっているという指摘があった（神林, 2007：p.2）。

そこで、本稿では、「キャリア」の意義の歴史的過程に着目し、言語学分野のメタファー研究<sup>2)</sup>の手法を援用しながら、キャリア概念を素因数分解して紐解くことを試みる。言葉の語義の派生・展開について理解することは意味の繋がりを知ることになるからである。とりわけ、多義語の意義・意味の変化について、原語から別の意義へとたどる歴史的変遷を多義の共時的視点から考察するアプローチ（以下、歴史参照アプローチ）により、意義どうしの関連を具体的に例示することを目的とする。なお、キャリア概念が「人生キャリア（life career）」と「職業キャリア（occupational career）」に二分法で把握できるとするSuper (1990) の立場に立脚し、本稿では“career” “way” “life” “occupation” の4つの多義語に焦点化する。

本稿の構成は以下の通りである。2では、言語学分野の研究を援用しながら多義語を用いた歴史参照アプローチに関する先行研究、および、研究方法を説明する。3では、「Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM Version4.0 (OED<sup>2)</sup><sup>3)</sup>」のデータを使用し、キャリア関連語の語義の歴史的

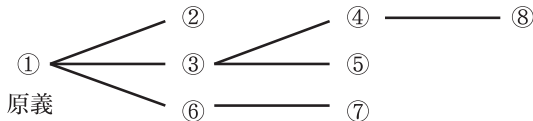
変遷について樹形図（意義展開図）を用いた分析を行う。最後に、4 では、結果の要約と今後の研究課題を論じる。

## 2. 先行研究と研究方法

### 2.1 先行研究

比喩の考察の始まりは紀元前後であり、メタファーという言葉自体は2500年の歴史をもち、その考察はアリストテレスに遡る（瀬戸, 2002:p.16）。その後、20世紀前半には記号論・哲学的メタファー論の観点から、メタファーが言葉だけの問題ではなく、認識や行動とも深く関わるのが広い視野から論じられてきた。さらに、1970年代における経験言語学、人間言語学、空間文法などの動きを経て、1980年代の認知言語学の潮流に流れ込んだ。1990年代に入り、共時的多義と意義の歴史的変化とは多くの点で同じデータを共有するとの認識が広がり、次第に認知科学の主要テーマのひとつとして、通時的分析に共時的分析を適用する動きが活発になった（Sweetser, 1990）。たとえば、図1中の①が原義であるとするば、番号は意義拡張の歴史的順序に対応するという（山口, 2001:p.63）。しかしながら、こうした手法は商業的な宣伝文句の陰に隠れて、頻度順の意義配列に対する不十分な学問的検討の状況を生んだ（瀬戸, 2008:p.715）。

以上の先行研究分析より、語の通時的意義変化をたどることによって多義語の意義のまとまりを有機的に捉えられる可能性、さらには、共時的分析に適用されない通時的な語義変化に重要な意義やメッセージが残され得る可能性があることがうかがえた。



出所：山口（2001）63頁

図1 通時的多義構造の概略

## 2.2 研究方法

本分析で使用するのは「Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM Version 4.0 (以下、OED<sup>2</sup>)」に収録されている語義／語釈・引用例から得られた抽出データである。本データを使用するメリットはデータの信頼性に加え、冊子体にはない電子版ならではの機能性（検索ソフトの充実等）にある。

なお、多義ネットワークを支える認知的な仕組みを分析する視点として、前述の多義語の有機的な繋がり的重要性を鑑みて、(i) 中心義の設定、(ii) 各意義の設定、(iii) 各意義の関連、(iv) 各意義の配列の4つに着目する。

分類分けの方法は、言語学分野における瀬戸（1997）や武田（2003）に倣い、比喩の3形式と対応させて「S転換（メタファー）」「E転換（メトニミー）」「C転換（シネクドキ）」という呼称を用いる（表1を参照<sup>4)</sup>）。メタファーは未知を既知で表現する方法である。メトニミーは現実世界の中で隣接関係にあるモノとモノとの間で、一方から他方へ指示が横すべりする現象である。シネクドキはより大きなカテゴリーとより小さなカテゴリーの間の包摂関係に基づく意味的伸縮現象である。こうした分類分けの方法は語のレベルを中心とした意味転換の最も重要なパターンとされる。すなわち、共時的な語の多義性の記述および通時的な語の意味変化の記述に重要な理論的支柱を与えるものである（巻下・瀬戸, 1997）。また、全体と部分の曖昧性や包摂関係のカテゴリー化の問題に対する補助的ツールとしても有効であろう。何よりも、キャリア語の認知的仕組みの経年的理解への深まりは、キャリアそのものの生成メカニズムの本質への接近を可能にする。

表1 意義転換の分類分け

3形式	意味	表記法	比 喩
メタファー	隠喩	(S) 転換	二つの概念の類似性 (similarity) に基づく比喩
メトニミー	換喩	(E) 転換	二つのモノ (entity) の隣接関係に基づく比喩
シネクドキ	提喩	(C) 転換	二つのモノの意味の包含関係(類と種の関係)に基づく比喩

出所：瀬戸（1997）p.166, 武田（2003）p.98.

### 3. 語義変化の考察

#### 3.1 意義展開図の設計

ここでは、D.Super (1990) の立場に立脚し、“career”、“way”、“life”、“occupation” 4つの多義語を例にとり、それぞれの語義の変化をOED<sup>2</sup>のデータを用いて樹形図の形（以降、意義展開図）で表す（図2～5）。作図の最大のメリットは語義の歴史的な変化と共時的多義ネットワークを同時に視覚的に捉えられる点である。その手順は以下の通りである。まず、OED<sup>2</sup>（CD-ROM）の検索機能を活用し、名詞・動詞の意味を中心に収集する。次に、年代順（昇順）に語義や用例を年号と共に採取していく<sup>5)</sup>。さらに、中心義や語源的定義として記されているものを中心にして年代順に配列していく。基本的にデータが膨大であるため、解釈が曖昧な箇所に関しては『英語 多義ネットワーク辞典』（瀬戸編, 2007）を援用した。

次に、作図の方法および図表の見方について記す。OED<sup>2</sup>の意義分類にしたがって、縦軸に意義、横軸に意義が使用された期間をとって表記することとする。複数の品詞（動詞および名詞）が存在する場合には、上段に動詞グループ、下段に名詞グループを配置した。なお、太文字は語源的な意義および現代英語において中核となる意義である。また、矢印は意義の転換を示し、カテゴリー変換を伴う大きな意義変換を太線矢印で示した（意義が推測の域を出ないものは細い矢印線で表示）。さらに、アルファベットの大文字で示したS、E、CはそれぞれS変換、E変換、C変換のことであり、意義に付した番号はOED<sup>2</sup>の分類番号を示す。加えて、意義の中で同一のグループにみなせるものを破線囲いで表した。

まず、4つのキャリア関連語の意義展開図（図2～5）を概観すると、いずれも各語の語源的意義は歴史にもまれながら現代英語に至るまでほぼ一貫してその語の中心的意義であり続けていることがわかる。例えば、OED<sup>2</sup>における“way”の「道・通路（語源的意義・中心義）」と同等の特性を持つ「(人が進む)道筋」という二つの意義は初出例がいずれも1000年前後で、極めて古くから区

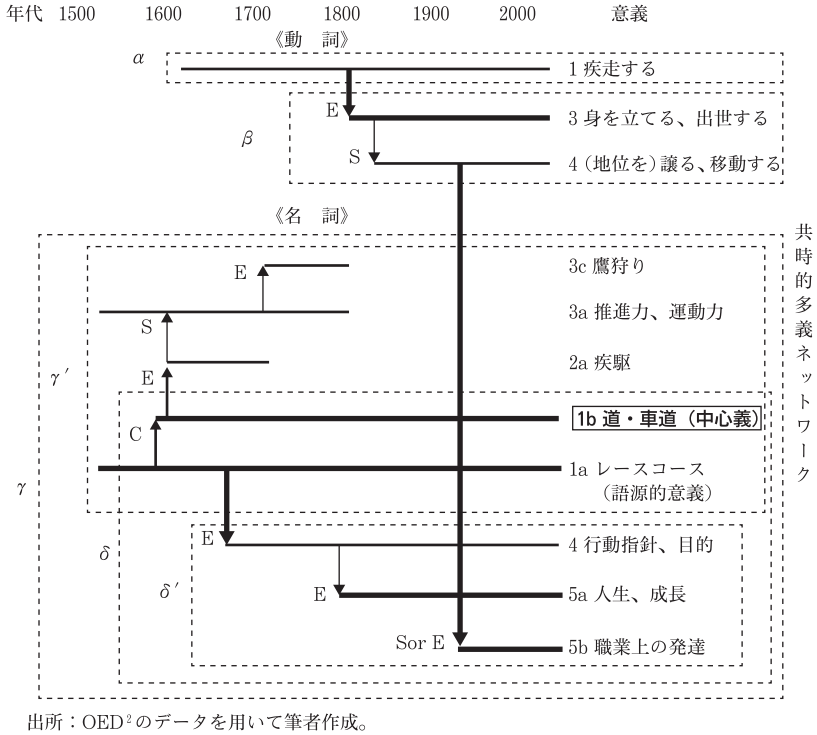


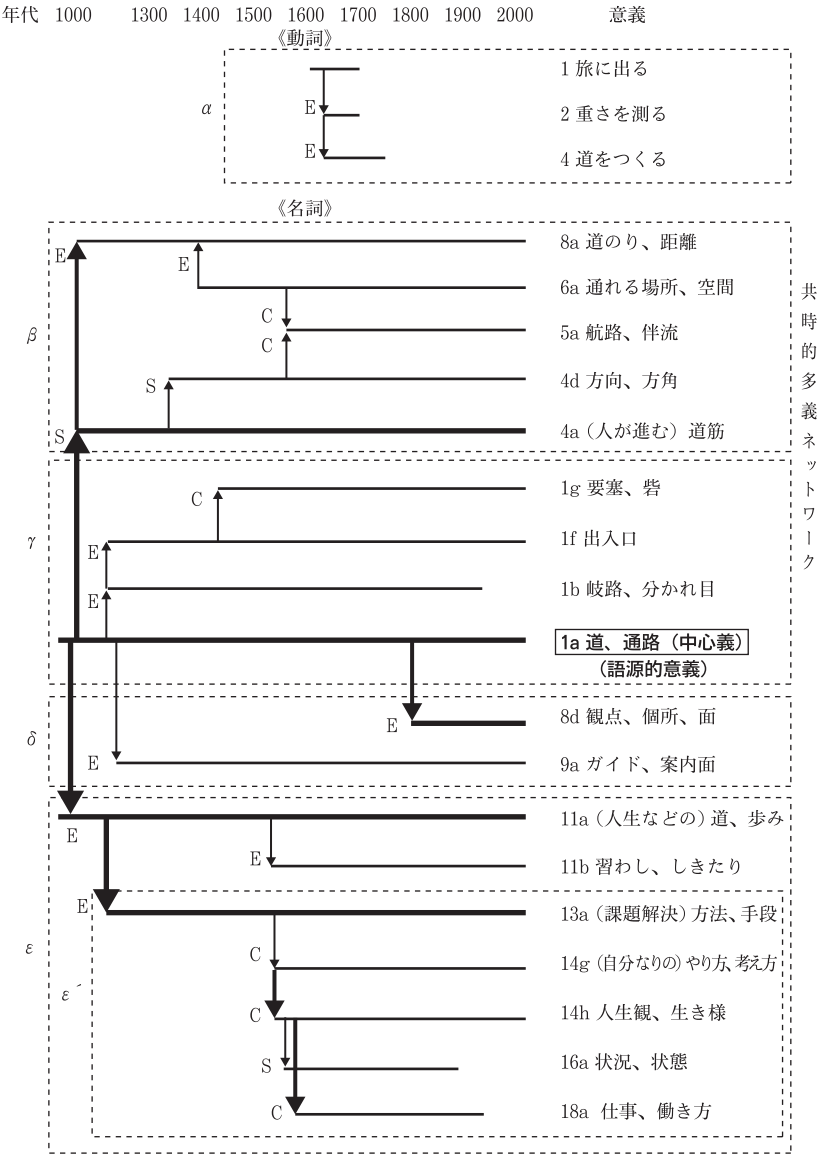
図 2 語義の歴史的変遷①：career

別なく使用されていたことが推察される（図 3）。また、“career”については、中心義である「道・車道」がモノに加えて人間の活動に派生した頃（OED<sup>2</sup>による意義初出は1599年）以降も一貫して跡形・足跡といった意義が基盤になっていることが確認できる<sup>6)</sup>

### 3.2 中心義の設定

中心義は意義配列の出発点に関係するものといえる。各図の意義欄の配列は頻出順でも歴史的な意義展開の順でもなく、共時的な意味ネットワークの中心となる意義が先頭にくることに注意を要する。中心義は文字通り、他の意義の

多義語における歴史的変化とその展開：キャリア語義の分析 中嶋



出所：OED<sup>2</sup>のデータを用いて筆者作成。

図 3 語義の歴史的変遷②：way

年代 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900 2000 意義

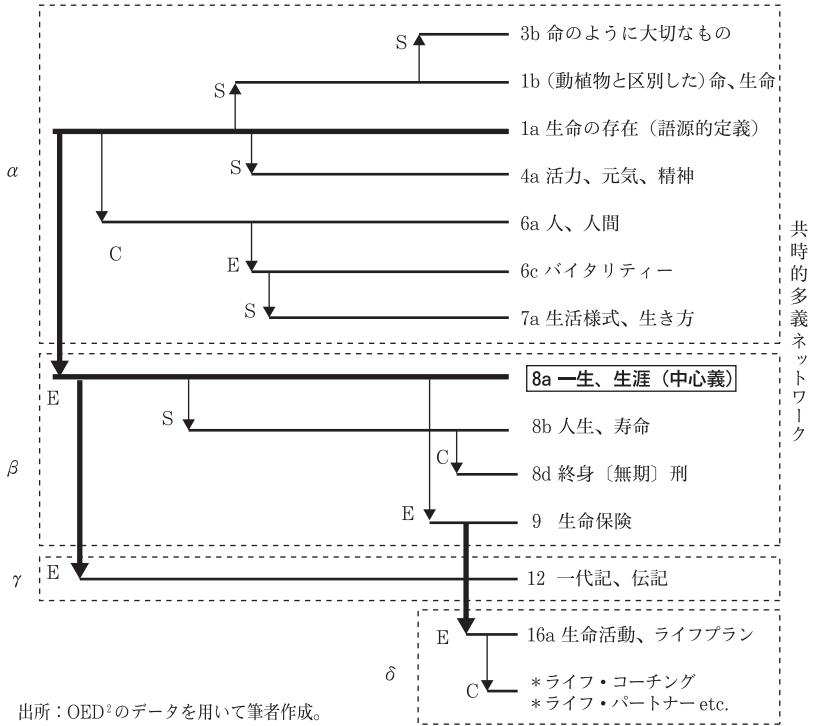


図4 語義の歴史的変遷③：life

前提となり、具体的で認知されやすく、図2～5のいずれにおいても意義展開の接点になりやすいことが認められた。この点については、図2の“career”の語源的意義(1a)や中心義(1b)における同一意義グループ(破線囲い)の重なるの多さ、あるいは、図3の“way”と図4の“life”における中心義からの上下矢印の多さからも確認できる。また、図5の“occupation”では語源的意義(1a)と中心義(4a)から出ている矢印の太さとして表れている。

一方で、初出状況と中心義の特徴との関連性も認められた。たとえば、中心義が「道」でほぼ同義である“career”と“way”を比較すると、初出時期が



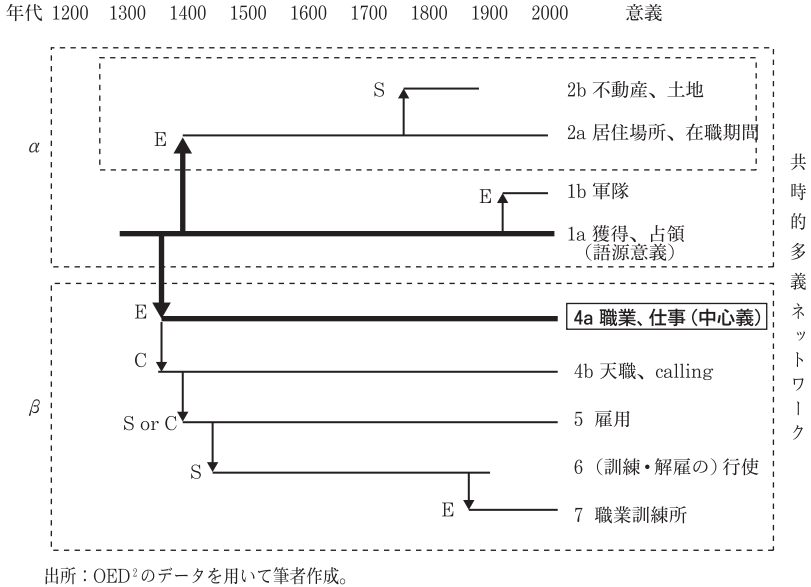


図5 語義の歴史的変遷④：occupation

500～600年も早く歴史のある“way”は移動する手段や場所としての道（語源的意義）から「人が進む道筋」（4a）へのS転換が早期段階に行われたために語源的意義がそのまま中心義に残った可能性がある。図2の“career”については、「レースコース」（1a）から「道・車道」（1b）へのS転換が初出間もない1580年頃に行われており、早期にS転換が起こることが語源的意義と中心義との近接性に関係する可能性が推察された。

### 3.3 各意義の設定

各定義の設定とは一つひとつの意義の認定に関わるものである。その際の判断基準になるのがS・E・Cの3つの転換による意義転換の見分けである。瀬戸（2008：p.716）によれば、メタファー（S転換）は類似性に基づき、メトニミー（E転換）は類似性を基礎に置き、シネクドキ（C転換）は包摂関係を基

盤とするかによって、ひとつの意義か別の意義かを判断できるという。

各図の多義ネットワークの拡がり方からは、最初は発話の含意に過ぎなかったものが慣用化することで新たな意義として認知されながら、単義語から多義語へと意味拡大してきた様相がうかがえた。例えば、図3の“way”では「人が進む道」が「物事が進む道」へと派生し、道を使って目的地に到達することを人間活動の領域に適用した結果として「(人生などの)道・歩み」に意義転換(E転換)されたと解釈することができる。同様に、図2の“career”においても、「レースコース(語源的意義)」から類似性を保ちながら、「行動指針、目的」→「人生、成長」→「職業上の発達」とE転換により語義変化が起こったと解釈できる。しかしながら、「人生、成長」→「職業上の発達」への転換部分には包摂関係の要素が含まれているため、図4の“life”の $\delta$ グループ内の「生命活動、ライフプラン」(16a)から「ライフ・コーチング」「ライフ・パートナー」の意義変換と同様に、C転換と解釈することもできよう。

### 3.4 各意義の関係

これは意義転換の下位区分に関係するものであるが、必ずしも明確に意義を仕分けできるとは限らない点に注意が必要であろう。この点について、瀬戸(2008)は繰り返し現れる意義展開のパターン(反復性)に注目する。

意義グループ間に共通して見られた特徴は、大きな転換点にメトニミー(E転換)が関与することであった。この解釈は、「E転換はドラスティックな意義変換を生む」という武田(2003:p.101)の指摘に符合する。例えば、“life”におけるカテゴリー変換を伴う大きな意義変換(太線矢印)を見ると、「生命の存在(語源的意義)」からで生命体が存在する期間を表す「一生・生涯」、「一生・生涯」から「ライフプラン(ライフ・キャリア)」の今日的な意味合いへの大きな変化を確認することができる(図4)<sup>7)</sup>。なお、こうした傾向は、“occupation”を例にとると、初出付近でS転換やC転換を繰り返した後、近年に近づくほどE転換が増える時系列的特徴として把握することができる(図

5)。加えて、E 転換の前後で小さな S 転換や C 転換が小刻みに行われる傾向も認められた（図 3 の  $\varepsilon'$  および図 4 の  $\beta \cdot \gamma \cdot \delta$  を参照）。

### 3.5 各意義の配列

意義の並べ方については、具象的意義→抽象的意義、身体的意義→精神的意義、知覚感覚的な意義→認識的意義などがあるが、あくまでも中心義との意義関連の強さが重要であるとされる（瀬戸, 2008）。

さて、本稿で最大の関心事であった“career”を用いて各意義の関係性について検証しておこう。ここでは、「レースコース（語源的意義）」および「道（中心義）」の両方を含む 2 つの同一グループ（ $\gamma'$  および  $\delta$ ）に着目する。16 世紀後半（OED<sup>2</sup> の意義初出は 1580 年）当初の動物が物理的に生きるという意義が一般化（C 転換）した  $\gamma'$  グループに対して、 $\delta$  グループでは 17 世紀（OED<sup>2</sup> の意義初出は 1599 年）以降、次第に生きるための目的・手段へと派生（E 転換）している展開が明確に示されている。しかし、動詞「疾走する」から「身を立てる・出世する」へ大きく E 転換したのは 19 世紀（OED<sup>2</sup> の意義初出は 1829 年）に入ってからである。そして、すぐ後に「昇進・出世」へと S 転換を遂げたのである。さらに、20 世紀後半（OED<sup>2</sup> による意義初出は 1965 年）、S 転換（もしくは E 転換）によって「職業上の発達（キャリア発達）」という今日的な語義に最も近い意義に派生していったと考えられる。産業構造の新たな変革期を迎えた 20 世紀後半以降、多様な産業や雇用形態の出現とともに、特定の組織や職業上の働き方にとどまらず、(働くこととの関わりを中心に置きながらも)  $\delta'$  グループの中で個人の視点から、各時代・各場面において意義が細分化していく様相が推察された。

## 4. まとめ

以上、本稿ではキャリア語義の派生・展開の歴史的過程に着目し、言語学分野のメタファー研究の手法を援用しながら、意義どうしの関連を例示した。具

体的には、原語から別の意義へとたどる歴史の変遷を多義の共時的視点から考察する歴史参照アプローチにより、多義語の意義展開図をキャリア関連用語に応用しながら、曖昧かつ多様な事象を具象的な表現に見立てて理解し直す方法を採用した。語義の歴史の変遷を横軸に、共義的多義ネットワークを縦軸にとってビジュアル化を試みることにより、任意の時代について各語の多義ネットワークがどのような状態にあったかを容易に知ることができた。本稿で用いた図解は、ある時代の多義ネットワークの姿を知ることができるばかりでなく、同時に、S 転換・E 転換・C 転換のうちのいずれによって意義どうしが互いに関連を持つかを示す点でも有効であった。本稿における4つの語義(“career”, “way”, “life”, “occupation”)に関する意義展開図の作図より、以下の4点が明らかになった。

第一に、各図において、語義的意義が歴史にもまれながら現代英語に至るまでほぼ一貫して中心的意義であり続けていることが確認できた。とりわけ、中心義がほぼ同義である“career”と“way”の比較検討からは、語源的意義からのS 転換が比較的早期に行われることが語源的意義と中心義との近接性(不変性)に関わる可能性がうかがえた。

第二に、各図の多義ネットワークの拡がり方からは、最初は発話の含意に過ぎなかったものが慣用化することで新たな意義として認知されながら、単義語から多義語へと意味拡大する展開を確認した。“career”や“occupation”では、初出付近でS 転換やC 転換を繰り返した後、近年に近づくほどE 転換が増える時系列的な特徴がみられた。

第三に、カテゴリー転換を伴う大きな意義の転換点ではE 転換が介在する場合が多いことが認められた。たとえば、“life”では「生命の存在(語源的意義)」→「一生・生涯」→「ライフプラン(ライフ・キャリア)」のカテゴリー変換を伴う大きな意義変換(太線矢印)がすべてE 転換であり、“career”や“occupation”でも同様の傾向がみられた。動詞の“career”は19世紀(OED<sup>2</sup>の意義初出は1829年)に入ってから「疾走する」から「身を立てる・出世する」

に大きくE転換をしている。また、“occupation”ではE転換の前後で小さなS転換やC転換が小刻みに行われる傾向が確認された。

第四に、“career”の歴史的変遷について、意義が各グループ内において個人の視点を通じて細分化していく様相が明らかとなった。すなわち、動物が物理的に生きるという初出当初の意義がC転換により一般化したグループとE転換により生きるための目的・手段へと派生していったグループに明確に展開が分けられた。昨今のキャリア教育分野で使用される語義は後者の系譜である。産業構造の新たな変革期を迎えた20世紀後半以降、多様な産業や雇用形態の出現とともに、特定の組織や職業上の働き方にとどまらず、個人の視点から今日的意義への語義変遷を確認した（図2の $\delta'$ グループ）。

しかしながら、語義展開の細分化についてはさらなる検討の余地を有する。なぜなら、本分析で採用した検索ソフト（OED<sup>2</sup>）内に含まれない言葉や論稿が存在する可能性を完全に排除できないからである。さらに、意義展開図上に表れない相違・誤差・背景など、今回の分析では明らかにできなかった部分は一定の限界であり、質的アプローチによる補完作業が必要になるであろう。

少なくとも、本分析結果から、言語は時代や世代を超えて、我々の生活と隣り合わせで少しずつ姿形を変えつつ、単義語から多義語へと意味拡大しながら、生き物として語義の派生・展開を脈々と続けていることが明らかとなった。その意味において、語義のドラスティックな変化が時代の要請の大きさに呼応するならば、語義変化と時代背景の精査は不可欠である。さらに、国際比較の視座からの検討を加えることにより、より多くの示唆が得られることが考えられる。筆者の今後の検討課題のひとつとしたい。

<参考文献>

- 神林龍 (2007)「歴史は繰り返すだろうか?」『日本労働研究雑誌』第562号、p.2.
- 楠見孝 編 (2007)『メタファー研究の最前線』ひつじ書房.
- 瀬戸賢一 (1986)『レトリックの宇宙』海鳴社.
- 瀬戸賢一 (1997)「意味のレトリック」、巻下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』研究社出版、pp.93-177.
- 瀬戸賢一 (2002)「メタファー研究の系譜」『月刊言語』第31巻第8号、pp.16-23.
- 瀬戸賢一 編著 (2007)『英語 多義ネットワーク辞典』小学館.
- 瀬戸賢一 (2008)「意味への回帰」『英語青年』第153巻第12号、pp.714-717.
- 瀬戸賢一 (2014)「語の多義性から見た文法構造」『関西英文学研究』第7号、pp.69-76.
- 武田勝昭 (2003)「多義語における歴史的変化と共時的ネットワーク」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集、pp.97-106.
- 中畠剛 (2013a)「とりあえず志向と初期キャリア形成—地方公務員への入職行動の分析」『日本労働研究雑誌』第632号、pp.87-101.
- 中畠剛 (2013b)「進路選択における潜在意識の研究：大学生の自由記述回答の分析」『千葉経済論叢』第48号、pp.23-39.
- 日本キャリアデザイン学会 (2014)『キャリアデザインの創造的相互作用—10年間の省察と今後の展望』第11回研究大会・総会 (2014年度大会) 資料集
- 巻下吉男・瀬戸賢一 (1997)『文化と発想とレトリック』研究社出版.
- 文部科学省 (2011)「キャリア教育とは何か」[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/.../1306818\\_04.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/.../1306818_04.pdf) (2014年8月20日取得)
- 山口治彦 (2001)「多義を記述するために—多義構造と辞書記述のテキスト構造」『神戸外大論叢』第52巻第2号、pp.61-91.
- 綿貫陽・須貝猛敏・宮川幸久・高松尚弘 (2000)『ロイヤル英文法—徹底例解』旺文社.
- Sweetser, E., 1990, From Etymology to Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press.
- Super, D.E., 1990, A life-span, life-space approach to career development. In D. Brown & L. Brook (Eds.), Career choice and development: Applying contemporary theories to practice. San Francisco: Jossey-Bass. pp.197-261.

注)

- <sup>1)</sup> 狭義には「局所的な相互作用を行う要素が多数集まることで、その総和とは異なる複雑な秩序が生じる自己組織化現象」（日本キャリアデザイン学会, 2014 : p. 3）。
- <sup>2)</sup> メタファー研究とは「曖昧かつ抽象的な概念・言語を具象的に理解しやすく見立てて理解し直すアプローチ方法」である。たとえば、瀬戸（1997）や楠見編（2007）が当該研究の学問体系について詳しく分析している。
- <sup>3)</sup> 50万語以上の収録語、および250万語の引用例が含まれているだけではなく、絶えず変化し続けてきた英語という言葉の千年の歴史において、いつの時代にも広く認められてきた権威のある辞書と言われる。
- <sup>4)</sup> 本論では、通時的な「意義の変化」と呼んできたものに対して、共時的な変化については「意義の転換」と呼称する（武田, 2003 : p.98）
- <sup>5)</sup> 紙幅の都合上、OED<sup>2</sup>の詳細な意義分類のうち、マイナーな意義と思われるものの大半を省略した。
- <sup>6)</sup> 「キャリア」の語源は、中世ラテン語の「車道」を起源とし、英語で、競馬場や競技場のコースやトラック（行路、足跡）を意味するものであった。そこから、人がたどる行路やその足跡、経歴、遍歴なども意味するようになった。しかし、20世紀後半の産業構造の新たな変革期を迎え、「キャリア」は、特定の職業や組織の中での働き方にとどまらず、広く「働くこととのかかわりを通しての個人の体験のつながりとしての生き様」を指すようになった(文部科学省, 2011)。
- <sup>7)</sup> lifeの語史については「とどまる所」という原義から始まり、「とどまる所」→「生き残ること」→「生命」→生命がとどまる「生き物」→生きている時間「生涯」へと派生したとされる（瀬戸, 2007 : p.552）